

将棋に魅せられし頃

(“大阪将軍” 沖元二さんとの初対局自戦記)

♪ ～ はじめに ～

40年以上前の古い話で恐縮ですが、私の中で将棋がひとつの趣味から一生の趣味に変わった瞬間と私にとり最も思い出深い一局のことを語らせて下さい。(注：以下の文章は17年位前に「大阪府立大学将棋部OB会会報」に寄稿したものを少し焼き直したものです。それ故、現在との時間差に違和感を覚えらるることなどがあると思います。さらに自戦記の中に、今考えると形勢判断が誤っていたと思える箇所もあります。しかし対局当時の気持ちと臨場感を重視し修正を加えていません。その点ご理解下さい)

♪ ～ 待ったが許されるならば… ～

将棋世界には昔「待ったが許されるならば…」という連載のコーナーがあり、対局時の感想やその頃の想いが様々な彩りを帯びて棋士の口から語られていた私もそれに習い、棋譜を振り返り、想いを語ってみようと思う。振り返ってみると、私は将棋において恵まれていたと思う。平成アマ最強戦での優勝も、最初のアマ名人戦大阪府代表も、幸運抜きにはあり得なかった。反面悔しい想いにも事欠かない。中でも慶応大学との東西決戦が忘れ難い。不可能なことだが、この一局の勝敗を逆に出来るなら、県代表を数回代償にしても良いとさえ思う。

♪ ～ 一軍戦デビュー ～

昭和44年春、私は2年だった。二段程度の棋力と一軍戦に出たいという強い意欲と、そして将棋に対する真摯な姿勢を持っていた。初めての一軍戦。前期に昇級し、チームはA級にいた。一日目の初戦、対京大戦。私は6将で初出場。対戦相手も戦型も記憶の彼方だ。しかし、負けたことは覚えている。チームも0-7の完敗。私は第2・第3試合にも負け、惨めな3連敗。しかしチームは5-2、5-2と連勝し、初日を2勝1敗で乗り切った。届きそうなのに結果を残せなかった私は、もう出して貰えないだろうという悲観と、出して欲しい、戦いたいという欲求の間で心が揺れ動いた1週間だった。

次週の朝、出して貰えると知った時の喜び…(きっと人はこの様な時に伸びるのだ)。この日の第一試合の終盤、7将の私の将棋に人が集まる。周りを見る余裕もない私には判らなかつたが、3-3の後の最後の一局だった。薄ぼんやりと終盤の記憶がある。縦横からの2枚の飛車と斜めからの角の焦点に敵玉がいる。自分でも勝ちだとは判っていたが、相手が投げるまで心は震えていた。

続く第二試合(最終戦)にも勝つと、チームはまたも4-3の辛勝。会場が妙な雰囲気になっている。勝ち数ではダントツの京大がなんと2試合を落とし、勝ち点3。18勝17敗ながら勝ち点4の我々が優勝していた。会場の千里山会館前での記念撮影、先輩諸氏の顔が輝いている。私も嬉しかった。期待に応えられた。やっと責任を果たせたという想いで一杯だった。

♪ ～ 東西決戦 ～

そして東西決戦(この頃は全日本学生将棋連盟結成の直前であり、この期まで関東・関西の優勝校同士の決戦で大学日本一を決めていた)。関東でも常連校が敗れ、フレッシュな慶応が乗り込んで来た。

キャプテンの楠本さんや大将の高木さん(いずれも4年)は、東西決戦を前にきっと勝算を探ったろう。本当のところは本人に聞かないと判らないが、今の私なりに推測すると「大将～副将の力は(相手も強いので)敵の力で相殺され互角。しかし上位4人で2-2は取れるだろう。下位3人が2-1なら勝てる」が目論見ではなかつたか…。そして下位の勝ち星のひとつを、私に期待し

ていた様な気がする。

しかし私は負けてしまう。実力で劣っていたと思う。それ故、私個人の将棋に対する悔いはない。チームの負け3-4負けが応えるだけだ。大将戦の周りに群がる人々、その輪の中に私もいた。秒読みの中、ゆっくりとゆっくりと倒れてゆく高木さんの姿が心に焼付く。自分がもう少し強ければ…と痛切に思った。

この敗戦が私を変えた。

♪ 自戦記-1 ～ 大阪3強 ～

その日から4年後、私の将棋の周りに幾重もの人垣。一隅には父の顔も…。昭和48年春、アマ名人戦大阪府大会の第一日最終戦（決勝トーナメント3回戦。予選を含めると5局目）。盤の前には沖元二アマ名人がいた。沖さんが負けそうだという噂が会場を駆け巡る。

私は狙っていた。この1年位前から、住まいのあった大阪市阿倍野区の道場や近隣の道場では物足りなくなった私は、大阪のあちこちの道場を巡っていた。また、同年代の将棋仲間のUさんと一緒に、京都（灘八段の道場）や神戸（藤内八段の道場）や川西（森安六段の道場）にも道場破り？に出掛け、普通の四段にはもう負けないとの自信を得つつあった。

余談が長くなるが、正棋会にもこの頃入会した。6局指しだった会の成績は負け越すことはなかったが、全勝するだけの力はまだなく、平均すると4勝2敗より少し良い位だった。その頃、大阪3強と呼ばれていた沖元二・長谷興民・小林正美の3氏はさすがに強く、私は手が空くといつも、この3人の誰かの将棋を黙って見ていた。

♪ 自戦記-2 ～ アマ名人戦大阪府大会第一日最終戦 対沖元二戦 ～

沖さんはこの4～5年の間にアマ名人を二度獲り、まさに油の乗り切った頃だった。私の実力では、その沖さんの将棋に届かないことは十分判っていた。しかし私は本気で狙っていた。「強いほうには必ず油断がある。まして無名の若者との初対局。絶対油断している」とライオンの不意を突くチャンスを、身構え息をひそめて待っていた。沖さんが目を覚ました時には遠く先行した私がいる。その差で逃げ切れるか…、そこからが本当の勝負だと思っていた。

振り駒で後手に…。この頃の沖さんは、全国制覇した四間飛車から三間飛車に戦法を変えつつあった。私は、対四間には自信がなかったものの、対三間は早仕掛けが有力と感じ、研究していた頃だった。▲7八飛と振った沖さんに、7筋突き捨てからの急戦を狙う布陣を敷いた。この形は1～2年前に加藤一二三八段（当時）が打ち出した新しい仕掛けで、前述のUさんが用いる以外には関西のアマチュアには殆ど広まっていなかった。

【第1図 29手目 ▲4七金まで】

【第1図は29手目▲4七金まで】



ここで▲4七金。不用意という気がした。相手は悪形。草むらから飛び出し△7五歩～△9五歩～△8六歩と躍りかかる。最良の時期での決戦だ。「攻めに抜群の力量を見せる沖さんを、受けに回らせたらどうなる…？」がこの将棋のテーマだ。▲9八飛もわずかだが疑問手と思う。▲9三歩成に△同桂と取り強く大駒の総交換を選択した私の判断が的確だった。

【第2図は57手目▲7七同銀まで】



香得、先手、相手の遊び駒（7七銀）を主張する後手と金の存在を主張する先手。銀の浮いた側面の弱さ、陣形の欠陥を突く△3五桂。▲4七金と上がった形の悪さを咎め、局面の良さとして具体化出来たと思った。パンチはクリーンヒットした。

危険を感じたライオンが目覚めます。△7八飛と銀当りに飛車をおろした手に、▲6六角が好手。△4四角と受ければ、そのまま放っておいて、先手で銀取りが受かっている。それを避けた△5五歩の軽い受けに、▲7二とから▲6三歩とと金を働かせて来る。

しかし、手を抜いた先手陣に△3五桂と襲いかかる。金が逃げれば△4七香で決まる。「どう受けるのか？」と思っていた私の読みの上に行く▲4八飛。

粘りのある受けだ。△同飛成では▲同金で手順に金が逃げる。仕方のない△7九飛成。受けに飛車を手放し相手の攻撃力が低下したとは言え、先手のつもりだった△3五桂も後手にされた。いずれ▲6八銀と遊び銀も働いてきそうな形、急に差が詰まって来た。

ついに、と金が働き▲6二歩成。じつと精算して、相手に手を渡すべきだったが、焦りだろうか、△4七桂成を先に決めてしまう。▲5五角から角を切って▲5五桂。沖流の攻めが開始された。

【第3図は81手目▲5五桂まで】



数手前の△6九角やここでの△5八金も焦り過ぎ。怖くとも△5三金と遊び駒を働かせるのが本手だろう。

眼の色が変わってから、沖さんの全身からは闘志のオーラがほとぼしっている。その圧力にさらされ続けていた私には、じつとした手が指せなかった。悪手を指した覚えはないのに、簡単に追いつかれ殆ど並んだ。私の唯一の救いは対局開始以来「攻めよう！沖さんを受けに回らせよう！」という方針で首尾一貫していることだ。私も闘志を失っていなかった。

△5八金▲同飛△同角成に、▲7九金と受けたのは絶対。飛車を切り△6九飛と打って、先手に適当な受けはない。▲4三銀と迫って来る。私の△3一香も悪い手ではない。次の△3三桂と共に、読みの入った際どい受けで、私の特徴が良く出た手だ。

この頃は対局時計もなく、適当な時間になると急に秒読みになる方式だった△4九馬と入るところで長考した記憶がある。勝ちがあるはずと思い、秒読み直前まで考えた。しかし読み切れず、運を天に任せて飛び込んだ。

【第4図は98手目△4九馬まで】

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
						龍	馬		馬	▲ 沖
			馬							二 金
							馬	王		三 銀
			馬		馬				馬	四 桂
		歩		桂						五 歩
馬				歩	歩				歩	六
	歩						歩	歩		七
							銀	玉		八
馬		銀	馬		馬		桂	香		九

沖さんは▲3五桂～▲4三龍から▲3六銀と上部を厚くして▲4九銀と馬を払う。先の私の長考は「ここで詰み有」が第一感だったからだ。ここで詰むのなら、猛烈に追い込まれたけれど際どく逃げ切ったという当初の予定通りの終局。しかし詰まない。▲3六銀が良く効いている。△4九同飛成は、心の片隅で負けを感じての指し手。どこかで逆転しており、冷静に見ると、ここではわずかに沖さんの方が良いはず。しかし、沖さんにも読み切れていないのが手つきで判った。局面は混沌としている。

▲3四金～▲2四角と自陣上部を完璧に厚くしてから▲1七玉。詰めろが見えない。秒読みの声に押され△3二歩とまたも際どい受け。これが攻めて来るものと思っていた沖さんの意表を突いた。沖さんの、後の見落としの伏線はここにあったと思う。

▲4二龍は時間切れギリギリの指し手、ためらいの手つき。これが私を勇気づける。負けとは思ったが見えた手があった。△2五歩▲同銀と取らせて、△3八銀。先手玉の退路を断つ訳もなく、また追う訳でもない、一見ぼんやりした手。このぼんやりさが流れによくマッチしていた。

「▲3三金と取れ！詰めろをかけて来い！」と心の中で叫ぶ。沖さんは一度3三の桂に手を触れたが、危機を感じてか手を離し、再度の考慮。迷っているのが感じられる。私は心の叫びを繰り返し、「取れ！」と念力を送る。秒に迫られ、沖さんはためらいながらも▲3三金と取った。

【第5図は117手目▲3三金まで】

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
							▲		▲	一
			△		龍	争		王		二
						金				三
二			争		争		角	争		四
三		歩		桂			銀			五
四	▲			歩	歩			歩		六
五		歩				歩	歩	玉		七
六						駒				八
七	△	銀			馬		桂	香		九

やったー！！詰みが見えていた。△3五角と宙空に捨てる角の抜群の手ざわり。この一局を凝縮した手だった。

その日の夕方、ひとり自宅のソファに横たわり、何度も何度も沖さんとの将棋を心の中で並べ返した。

「アマ名人を倒した！日本一に勝った！」その言葉は鬱屈としていたその頃の私の胸に心地よく響いた。陽の残る空、幸せな午後だった。

♪ 自戦記-3 ～ アマ名人戦大阪府大会第二日 ～

一週間後、ベスト16から、阿倍野区にあった古い将棋連盟の和室での対局全国大会代表まで残り4局、気合が入っていた。

トーナメント4回戦に勝った後、準々決勝は原田一良さん（代表経験5回）準決勝は杉本好一さん（代表経験6回）、決勝では3連覇を狙う小林正美さんと、代表経験のある実力者を次々と破り、初出場代表を勝ち獲った（準決勝からは新聞の切り抜きも残っており、懐かしく思い出せた）。同時に代表となった小林純夫さん（東大OB、後のアマ名人・朝日アマ名人、当時29才）と共に、新聞に「…いずれも新人ながら実力は抜群。大阪アマ界に飛び出した待望の新星二つ…」と褒めて頂いた。将棋に関しては得意の絶頂だった。

♪ ～（1998年当時の）近況報告～

長男は今年大学（*1）に入った。昨年11月、夏の総体予選に負けてもサッカー部を辞めず、年末の高校選手権を目指す長男を見て「浪人するつもりかな？」と危惧していた私でしたが、兵庫県予選を次々と勝ち進むにつれて親の方の気持ちも変わり「浪人してもいいから、国立競技場に連れて行ってくれ！」

ベスト16からの3試合、女房と二人で応援。親孝行されるってこんな感じなんだと実感。準決勝で敗れ、全国大会には行けなかったものの、神戸中央球場ではスタンドから観戦。さわやかさを存分に満喫した秋だった。

私も大学入学の頃を思い出す。体の大きな私は、色々なスポーツクラブから誘われた。スポーツは好きでも体育会系の雰囲気は合わないと感じていた私は航空部（グライダー）との比較に迷いながらも、白鷺門そばの古い木造の中にあつた部室の戸をたたいた。

あれから30年の月日が流れた。今はすっかり中年に染まり、妻と二男一女の5人家族で相変わらず将棋に打ち込みながら、楽しく暮らしている。

アマ名人戦の代表となった当時、母が亡くなって3年程経っていた。私が勝ち進むのを見ながら、父も親孝行を感じてくれたのだろうか…

以上

棋譜

表題：1973年（昭和48年）アマ名人戦大阪府大会第1日最終戦

先手：沖 元二

後手：辻 清治

▲7六歩	△3四歩	▲6六歩	△8四歩	▲7八飛	△8五歩
▲7七角	△6二銀	▲6八銀	△4二玉	▲4八玉	△3二玉
▲3八玉	△7四歩	▲2八玉	△5四歩	▲5六歩	△5二金右
▲3八銀	△1四歩	▲1六歩	△9四歩	▲5八金左	△4二銀
▲4六歩	△5三銀左	▲9六歩	△6四歩	▲4七金	【第1図】 △7五歩
▲同歩	△9五歩	▲同歩	△8六歩	▲同角	△6六角
▲9八飛	△2二角	▲9四歩	△8八歩	▲7七桂	△8九歩成
▲9三歩成	△同桂	▲9二歩	△同香	▲9四歩	△9九と
▲9六飛	△8五桂	▲9三歩成	△7七桂成	▲8二と	△9六香
▲7七角	△同角成	▲同銀	【第2図】 △7八飛	▲7八飛	▲6六角 △5五歩
▲7二と	△5一銀	▲6三歩	△3五桂	▲4八飛	△7九飛成
▲6二歩成	△4七桂成	▲同飛	△6二銀上	▲同と	△同金
▲5五角	△6九角	▲4八飛	△4四銀	▲同角	△同歩
▲6八銀	△8九龍	▲5五桂	【第3図】 △5八金	▲4三銀	▲同飛 △同角成
▲7九金	△同龍	▲同銀	△6九飛	▲4三飛	△2二玉
▲3四銀成	△3一香	▲2三成銀	△同玉	▲4三玉	△3三桂
▲4一飛成	△4九馬	【第4図】 ▲3五桂	▲3五桂	△3四玉	▲4三龍 △3五玉
▲3六銀	△2四玉	▲4九銀	△同飛成	▲3四金	△1三玉
▲2四角	△1二玉	▲1七玉	△3二歩	▲4二龍	△2五歩
▲同銀	△3八銀	▲3三金	【第5図】 △3五	▲3五角	▲同角 △2七銀成
▲同玉	△3八銀				

まで122手で後手 辻の勝ち